

【助成事業：高校生商店街】

ポイント

高校生商店街で若い感性を導入し中心市街地を活性化

宮崎市内の中心部に立地する商店街の連合組織。周辺への大型モールの進出やネット販売等により中心市街地の集客力維持が厳しさを増す中で、若い世代の集客と商店街の認知度向上を狙って実施した「高校生商店街」が大ヒット。現在も年4回、参加する高校ごとの特色を活かして開催。これにより、商店街への高校生の来街も増え、街の活性化や空き店舗解消の大きな力となっている。

商店街情報

所在地：宮崎県宮崎市橘通東3丁目1番11号
アゲインビル2階

地域の人口：403,717人 193,745世帯
(宮崎市 平成30年3月現在)

商店街の類型：広域型商店街

会員数：9会員

店舗数：452店舗(主な業種構成：紳士・婦人服、時計・宝飾、食料品、文具・雑貨、薬品、飲食・サービスなど)

TEL:0985-23-4756 FAX:0985-23-4757

URL: <http://www.miyazaki-matsuri-event.com/>



商店街の風景(若草通商店街)

商店街の概要と近年の環境変化

宮崎市の中心市街地に位置する9つの商店街により構成される連合体。単独の商店街では難しい広域型のイベントやカード事業のほか、中心市街地の活性化に向けて行政等との連携による街づくりを積極的に推進している。宮崎市の中心市街地は、一番街商店街、若草通商店街、橘通中央商店街など6つの商店街と大型店が連携したモールエリアに、ファッション関連から飲食・サービスまで昼と夜の顔を併せ持つ広域型の商業集積を形成している。しかし近年は、郊外型大型店の増加やネット販売等で若い世代の商店街離れが進む一方、物販店が減って空き店舗が増えるなど商店街の魅力度の低下が課題となっていた。これまで連合会では、朝市や歳末大売り出し等を実施してきたが、効果は一時的で、平時の集客増にはつながり難い悩みがあった。

こうした中で平成24年度に、高校生を対象に聞き取り調査を行ったところ、「商店街に一度も行ったがない」という回答が多数を占めることが判明。一方、宮崎市内には農・商・工・水産等特徴ある実業高校が多く、高校側では成果発表の場や専門分野を活用した実習の場を求めていた。そこで連合会では、空き店舗の活用等を目指して商業者・店舗のオーナー・高校生等で構成する検討委員会を設置。検討を重ねた結果、高校生等の若者に商店街に愛着を持ってもらうことを期待して、オーナーから提供された空き店舗を高校生の活動の場として利用してもらい、商店街はイベントの支援と販促活動を担当することとした。

これらの高校生の企画による出店等のイベントを継続した結果若者の来街が増加し、こうした若者向けの飲食店や物販店の出店が増えるなどの効果が徐々に表れつつある。



上 一番街商店街
中 橘通中央商店街
下 宮崎市中心市街地の
イルミネーション

助成事業の概要とその成果

「高校生商店街」は、商業や農業、芸術、ファッション、調理などを学ぶ高校生が授業の成果を活かしてそれぞれ独自に企画し、商店街のアーケード内や空き店舗を使って出店やパフォーマンスを行うイベントである。アーケード内の特設ブースでは、商業高校生が販売実習として自分達が仕入れた商品を販売したほか、農業高校生は実習で栽培した農作物等を販売。パティシエ科やエステ科の生徒は、手作りスイーツの販売やネイルケア体験を行った。また県高校文化連盟に加盟する高校生達は、空き店舗を活用して美術、書道、写真作品を展示したほか、アーケード内で楽器の演奏や合唱、ダンス等のパフォーマンスを行った。

事業の実施に当たっては、商店街やオーナーの代表、高校の教師、NPO、行政等による実行委員会を組織し、高校生の意見を企画に反映させるとともに、大学教授のアドバイスも参考にした。運営面では、出店やイベントの内容は高校生に任せ、当連合会は専従の専務理事のほか3名の職員が事務局機能を担い、連携する高校や空き店舗オーナーなどとの連絡調整のほか、実施場所の確保、チラシの作成・配布などを行った。

具体的な内容は以下の通りである。

<平成25年度事業：『空き店舗を活用したにぎわい創出』事業>

第1回目は、県立宮崎商業高校の2年生285人が14店舗に分かれてアーケード内の特設ブースに出店。お菓子や麺類などの商品の選定や製造元への数量や価格交渉等の仕入れから接客・販売までを実習した。第2回と第3回は県立宮崎農業高校生が実習で栽培した農産物等の販売を実施。シクラメンやトマト、米のほか、マドレーヌや味噌などの加工品16品目の販売を生徒約40人が担当した。各回とも1,000名以上の来街者があり、商品の大半が完売するほどの盛況だった。顧客からは、「懸命に接客する高校生の姿が新鮮で、つい買い過ぎた」との声ももらっている。

<平成26年度事業：高校生商店街>

平成26年度は県の教育委員会とも連携して参加校を増やし、工業系の生徒によるイベント、美術系の生徒によるパフォーマンス等の文化活動を新たに取り入れ、高校生が学ぶ専門分野の活用をさらに充実させた。

第1回は宮崎県高等学校文化連盟による「ハイスクールまちなかアート」を5日間実施。3ヶ所の空き店舗で美術、書道、写真作品を展示したほか、最終日には吹奏楽や弦楽アンサンブルの演奏、合唱、ダンス、書道パフォーマンスのステージイベントを行った。第2回は電子機械科など工業系の専門科をもつ宮崎県立佐土原高校によるラジコンの無料体験等を予定していたが、台風のため残念ながら中止となった。第3回は県立宮崎農業高校による農産物即売会で、アーケードのある商店街の路上で果物、野菜、米、花、ジャム、ケーキなどを販売した。第4回は、ファッションや調理などの専門科のある日章学園高校のパティシエ科がスイーツを販売し、調理科がステーキの模擬店を開催、エステ科はネイルケア体験などを行った。

<助成事業による成果等>

高校生商店街イベントには、生徒の家族や友人など普段来街しない人も多く訪れ、一生懸命に販売やパフォーマンスを行う高校生との交流を楽しんだ。生徒にとっては、来街者や店主の「おじさん」「おばさん」との会話等を通して、これまで縁遠かった商店街のコミュニティを実体験できたことが大きな成果であり、連合会としては、高校生が商店街に帰って来てくれることで、若者向けの店舗の出店や売上の向上に期待が高まった。



上 平成25年10月 宮崎商業高校による販売実習の様子

下 平成25年12月 宮崎農業高校による「農産物即売会」



上 平成26年9月 宮崎県高校文化連盟による「ハイスクールまちなかアート」

下 平成27年2月 日章学園高校によるスイーツ販売の様子

助成事業以降の商店街活動

商店街の活性化と魅力あるまちづくりを目指す当連合会では、消費者と高校生、商店街との交流が良好なコミュニティづくりにつながっていることから、助成事業後も高校生商店街を継続して開催している。本イベントの実施によって中心商店街に若者が少しずつ増えてきており、制服姿の高校生を街で見かけるようになった。さらに高校生が出店する若草通商店街振興組合では、若者向けの飲食店や物販店の出店により空き店舗数が減少するという好結果を生み、このため会場の調達に苦労するなど連合会では嬉しい悲鳴を上げている。

一方、高校生の出店で商店主達も刺激を受け、自主的に振る舞いなどの販促事業を行う店が出るほか、空き店舗を低額で賃貸するオーナーの協力の輪も広がりつつある。

助成事業実施後の当連合会の主な取り組みは以下のとおり。

①高校生商店街

平成28年度の第1回は宮崎県高等学校文化連盟による「ハイスクールまちなかアート」を実施。第2回は宮崎第一高校による販売実習、第3回は県立宮崎農業高校の農産物販売、第4回は日章学園高校によるスイーツの販売等を行った。

平成29年度は新たに県立宮崎海洋高校の3年生30名が初出店し、「カツオの解体ショー」を行って捌いたカツオを来街者に振る舞った。商品では、特に遠洋実習で獲れた魚の缶詰が人気で、短時間に完売となるなど大盛況だった。



②いっチャが宮崎・楠並木朝市

毎月、第一・第三日曜日に宮崎県庁前の通りで朝市を開催しており、平成29年10月で10周年を迎え、11月に記念イベントを行った。中心市街地の活性化、農林水産業の振興、新たな観光魅力の創出を目的に新鮮な野菜や果物、鶏の炭火焼、木工品、お茶、椎茸、鉢花、蜂蜜のほか、県立宮崎農業高校も出店し、栽培した農産物を販売している。

また、朝市に出店して接客マナーが身に付いた学生は、就職の面接でも確かな受け答えができるため、就職率が高いと評判になっている。



平成28年10月 宮崎第一高校による
開発商品(スイーツ)販売実習の様子



平成29年12月 宮崎海洋高校による
カツオの解体ショー & 振る舞いの様子



平成19年より開催されている「いっチャが宮崎・楠並木朝市」
宮崎県庁前の楠並木通りに約60の店舗が立ち並ぶ



自治体による活性化支援等

宮崎市

宮崎市では、商店街の経済活動等が地域の活性化に果たす役割の重要性に鑑み、商店主連による「まちづくり」活動を積極的に進めてもらいたいと考えている。平成20年7月に施行した「まちづくりの推進に関する条例」は、商店街等が祭りやイベントの開催を通じて積極的に地域の「まちづくり活動」に参画・協力してもらうことを目的として制定しており、必要に応じた事業者の負担等についても盛り込んでいる。

また、この条例では、空き店舗対策事業等で家賃や店舗改修費の補助を得ている事業者については、地域の商店街への加入とその活動への協力を義務付けている。

さらに、商店街等が取り組む「まちづくり活動」を支援するため、『地域のにぎわい創出支援事業』を実施している。この事業では、商店街等が事業に関するプレゼンテーションを行い、効果が高いと判断される取り組みについて採択する方法をとっている。宮崎市商店街振興組合連合会が行う「高校生商店街」事業については、若者にとっては仕事に接する機会となり、まちづくりへの貢献にもつながることから助成対象としている。なお、商店街のハード面の整備に関しては、街路灯の電気料やLED化のための経費等について助成を行っている。

商店街の今後の戦略

若者のまちなか回帰でまちを再生

郊外への大型モールの進出と顧客離れが大きな課題となる中で、これからの商店街は、商品やサービスの提供だけでなく、地域の人々の交流を促進するなどの「コミュニティ機能」を強化していかなければならないと考えている。

高校生達には、「商店街に足を運び、買い物をしてもらいたい」のが本音だが、その前に「地域コミュニティに参加し、商店街の良さを知ってもらいたい」という強い思いが当連合会にはある。これは、「若者のまちなか回帰」が「まちの再生」につながると考えるからである。このため高校生商店街については、さらに参加高校の枠を広げ、高校同士の連携を促進させるなど一層の発展を目指してさらなる賑わい創出につなげたい。また、商品の出店だけでなく吹奏楽など部活動の発表の場としても高校生商店街を利用してもらい、より多くのお客様に来街してもらえるよう周知方法やイベントの趣旨に合わせた演出の方法等にも創意工夫をしていきたい。

こうした取り組みを通して商業者や空き店舗オーナーのまちづくりへの意識を高め、中心商店街の魅力向上につなげていきたい。



～ 仕掛け人 ～

宮崎市商店街振興組合連合会

左 専務理事 日高耕平
右 事務局長 櫛間節夫



取材を通じて明らかになったこと

当連合会による高校生商店街を高校野球に例えると、プレイヤーは商業高校等の高校生、観客は来街者で、舞台を作って広報・宣伝と運営を支援したのが商店街という構図になる。さらに、舞台である空き店舗を提供した、閉めた店舗の活用に悩むオーナー会員の協力も見逃せない。こうした中心市街地全体を盛り上げるイベントを展開し、より広域の集客と若者を呼び込んだ原動力は、商店街同士の結束による連合会のパワーであるといえる。街を代表する連合会の力によって検討委員会が組織され、県の教育委員会等様々な機関との連携が可能になったことも成功につながった大きな要因であろう。

本事業は助成以降も商店街独自の努力で継続されており、これまでに商業高校だけでも概ね1,500人の生徒達が参加し地域コミュニティの良さを体感してくれたことになる。「若者世代のまちなか回帰」を目指す当連合会の尽力により、今後の地域の一層の盛り上がりが期待されている。